



Title	“かゆみ”とむし
Author(s)	吉田, 政弘
Citation	makoto. 1982, 39-40, p. 4-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

表1 ネズミの外部寄生虫—ドブネズミとクマネズミの比較

ドブネズミの外部寄生虫 (地点大阪府)

年	地 点	調査鼠数	ヒメダニ	イエダニ	ネズミダニ	トネズミ	ヨーロッパネズミ	メクランズミ	イエネズミラミ
1974	岸和田	3	0	2	9	0	0	0	0
	高槻	2	0	0	0	7	0	0	0
	布施	1	0	0	0	6	0	0	0
	田方	5	2	0	0	0	0	0	0
	吹田	6	0	0	0	5	0	0	0
	富田林	1	0	0	0	0	0	0	1
1975	門真	5	0	0	1	2	0	0	0
	八尾	4	0	0	0	0	0	0	3
	藤井寺	1	0	0	0	0	0	0	0
	貝塚	1	0	0	0	0	0	0	0
1976	門真	2	1	0	0	3	0	0	0
	吹田	9	6	1	0	0	0	0	0
	守口	1	0	0	0	1	0	0	0
1977	泉大津	1	1	0	0	0	0	0	0
	門真	2	0	0	0	0	0	0	0
	合 計	44	10	3	10	24	0	4	
	組成(%)			45.1			54.9		
			19.6	5.9	19.6	47.1	0	7.8	

クマネズミの外部寄生虫

年	地 点	調査鼠数	ヒメダニ	イエダニ	ネズミダニ	トネズミ	フジツブガムシ	ヨーロッパネズミ	メクランズミ	イエネズミラミ
1974	岸和田	12	0	11	1	0	31	0	0	0
	布施	5	0	0	0	0	0	0	0	6
	枚方	3	0	0	0	0	0	0	0	0
	富田林	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1975	池田	8	0	0	0	0	0	1	0	0
	八尾	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	藤井寺	4	0	2	0	0	0	0	0	1
1976	門真	12	6	18	0	0	39	0	0	6
	高槻	5	0	28	0	0	4	23	1	1
	寝屋川	16	1	2	0	10	1	1	0	0
	富田林	1	0	0	0	0	18	0	0	0
	合 計	68	7	61	1	10	94	24	15	
	組成(%)			37.3			62.7			
			3.3	28.8	0.4	4.7	44.3	11.3	7.1	

病気と思われており、近年患者も漸減してきていますが、最近では、またぞろ各地に多くの患者発生を見るようになり、再び流行の様相を呈しています。

患者発生を見るようになり、再び流行の様相を呈しています。

ぶら下がるわけです。よく獣犬の足などに付着しているあのダニ類であります。このダニ類は吸血時に、寄主の筋肉にしづかりとくいこみくちばしを血管にさしむために、むりやりに引っ張って取り除ぞうとしています。最近では、自然のい

く分残された、山地をひかえる所に開発された住宅の庭先でのマダニによる被害が散見される様になってきています。

以上は、本来ネズミ類に寄生しているダニ類や昆虫類を中心に、して“かゆみ”を与える生物についてみてきました。その他にまだだたくさんの生物が考えられます。これからは、人の家

のうちの大部の雌蚊は、人や動物にたかり吸血して産卵し、その種族を維持しているのです。これらの蚊類達も本来は、人以

外の動物から吸血しているのですが、その生活圏に入りこんだ人間達にも、その吸血源を求めてくるわけであります。とくにコガタアカイエカという蚊は、水田から主として発生する種類ですが、本来は、牛や豚、馬などの大型の哺乳動物から夜間吸血するのですが、それらの吸血源にめぐりあわながった雌蚊は、近くにいるヒトにたかってきます。水田を多くかかる日本をはじめとするアジア地域では、日本脳炎ウイルスを伝播し、そのため患者を見るわけです。この他に、お墓参り等の際にあらうけのそじや献血しているあいだに、待っていましたとばかりに、そいらの草むらなどにひそんでいた小さい黒な蚊ヒトスジシマカに首すじや足まわりのところに、まっ黒になる程にたかって、おつ払つてもなんどもアタックしてくるいやな蚊に悩まされるものです。この蚊は、コガタアカイエカと違つて、せまい水域で、例えは、空岳、古タイヤ、切り竹やあけなどで、ほんのちょっとした小水域で増えます。犬小屋やニワトリ小屋などでは、コガタアカイエカとよく似たアカイエカがわんさと吸血に襲来し動物

達もバタつきます。あげくのはれによる犬の感染率は高いと云われ、そのため犬の死亡率も高い様です。これらのちっぽけな蚊達も、かゆみ以外にも、多くの疾病を人や動物に伝搬するためいやな仲間達ではあります。これらの蚊は、いずれも人の建物の外の水域で幼虫が発生するのですが、建物の内にも水のあるところでも蚊達は発生しておる、人が悩まされています。それは、多くはビルの地下室などにある遊水ピットや浄化槽のような汚水域で、アカイエカとそつくりの蚊が発生します。この蚊はチカイエカといつて外見上は、アカイエカと区別がつけにくいのですが、生態上は非常に違っております。アカイエカの雌蚊は一回目の産卵から動物の血液を必要としますが、チカイエカは一回目の産卵は幼虫時代に摂取した栄養でまかなわれるため、吸血を必要としませんが、二回目の産卵からは温血動物からの吸血が必要となるわけであります。その吸血源を求めて、ビルの中では、色々な空間から（排水管、送風ダクト等）ビルの内に侵入してくるので、内にいる人達が咬まれて、かゆみの

原因を作り出しています。最近一つとして水のあるところの生物相にも目を向けていきたいのです。このチカイエカと同時に発生している生物は他にもあります。それには、チョウバエ類であったり、ゴキブリ類の大繁殖源であったりするわけです。あの人間の汚物の中で堂々と生存する生き物達。それゆえにそれらの発生源から這い、とび出したゴキブリ、蚊、チョウバエ類などの昆虫達の持つている細菌の多いさは想像を絶する程でなんと不衛生きわまらないことがあります。一度、ビルの遊水ピットや浄化槽のフタをあけてみませんか?!今までに登場させてきた蚊類達は、まだそのすがたを肉眼で認められ、比較的発見がたやすいのですが、これらよりもまだまだ小さい生き物が、人にわるさをしています。皆さんも御存知だと思いますが、毎年真夏のね苦しい時が到来しますと、あちこちの住宅で集団的に痛みを伴なった"かゆみ"を訴えられます。この虫は、アリガタバチの仲間で、他の昆虫類の寄生蜂であります。この仲間による被害には、クロアリガタバチとシバンムシ

アリガタバチの二種類が考えられます。前者のクロアリガタバチは、主としてヒメスギカラミキリムシの幼虫に寄生しています。ヒメスギカラミキリムシは杉の皮の形成層を幼虫のえさとし、成育します。このことは、被害の訴えられた家屋の天井裏を探索すれば歴然とするでしょう。あるPCOの方の御好意でその現場を観察させて頂いたところ、そのお宅の屋根がわらの下に張つてある野地板（バラ板か？）に多くの生の杉皮が残っており、その皮の所々に穴があき、そこから細い木屑が、天井裏板上にアリ塚のようにならっており、です。懐中電灯で照らして何かおらないか目を凝らすと、そこら中にヒメスギカラミキリの成虫が累々と転がり、クロアリガタバチもそこいら一面にはいまわっているのです。発生源は天井裏の杉皮のついた木材にあったのです。後者のシバンムシアリガタバチは、一九七〇年代になって名古屋市の報告をきっかけとして、それより少し遅れて大阪府下でも大規模にその被害の発生を見るようになってきました。もう最近では珍らしくはない程です。今年も例年に違がわず暑い夏に集中して発生してい

るのです。このアリガタバチはクロアリガタバチの発生期が春や秋に見られるのとは少し違っています。これは、寄主であるシバンムシが主として乾燥した植物性のもの、家庭内にあてはめてみますと、乾燥食料品(そらめん、干しうどん、フ等)や稻ワラを主材としたよく乾燥したタタミなどの中によくふえ、その幼虫に寄生します。これらアリガタバチによる被害は、痛みを伴なったかゆみを呈しますのは、アリガタバチの棘針の挿入による痛みであり、同時に起る毒液の注入によるアレルギー反応としてかゆみが生じてくるわけであります。これらの寄生蜂による被害は、蚊と同様に雌によるもので雄はそのようないのです。そのような生物による場合は、人によつては原因不明の……という事になりかが、まだまだ小さい生物の被害これらハチ類に及んでも比較的肉眼で認められやすいのですねないので。そのような生物にはどんなものがあるでしょうか。大きさが大抵の場合0.2~0.3mm程度のホコリ程の細かい肉眼的にみとめられがたいダニ類が悪さをしているのです。これらは主に家屋内のゴミの中から見

い出されます。家の中のゴミ、日常そうじによって除かれるゴミ（主にそうじ機を使って）の中の生物相を覗いてみましょう。ゴミはゴミと簡単にかたづけてしまえるでしょうか。ワイルドマンフラスコーガソリン法で極くわずかのゴミを検査にかけてみますと、口紙上に展開されたゴミ類にまじって多くのダニ類……乳白色やあめ色にかがやいて見い出されます。私共は、府下の保健所から寄せられる「かゆみ」の原因を生物の視点から分析するため、被害を訴える住民の家庭から採取されたゴミの中にどのような生物が存在するか検査し、その結果より「かゆみ」の原因になるであろう生物を分析しています。これら的原因のうちでトップに上げられるのは、ツメダニ類であろうと考えられます。表2にあげてあります様に肉眼的には原因の分らないとした多くのサンプル中からこのツメダニ類が共通して発見されています。これが、ツメダニ類の口器と比較してみると、ツメダニ類は、ツツガムシやイエダニ類と同様に捕入す

表2-1

1981

月	検査ゴミ (g/r)	コナダニ	チリダニ	ツメダニ	ササラダニ	前気門 S P	中気門 S P	ヒゼンダニ	ノミ	南京虫	合計
8	1.1 匹/戸/g/r	9	348	95	52	6	2	0	1	0	513
	8.2 %	316	86	47	6	2	0	0	1	0	465
	1.8 %	68.0	18.6	10.2	1.2	0.4	0	0	0.2	0	100
9	4.4 匹/戸/g/r	10	1,543	399	53	7	9	0	0	2	1,933
	2.3 %	351	90.7	12	1.6	2.0	0	0	0	0.5	439
	0.5 %	79.8	20.6	2.7	0.4	0.5	0	0	0	0.1	100
10	0.7 匹/戸/g/r	1	19	0	20	0	1	1	0	0	42
	1.4 %	27.1	0	28.6	0	1.4	1.4	0	0	0	60
	2.4 %	45.2	0	47.6	0	2.4	2.4	0	0	0	100

表2-2

1981

月	検査数	チリダニ	コナダニ	ツメダニ	ササラダニ	前気門 S P	中気門 S P	ヒゼンダニ	ノミ	南京虫
8	10	9	2	7	8	3	1	0	1	0
9	40	40	3	36	13	3	2	0	0	2
10	4	2	1	0	0	1	1	1	0	0
合計	54	51	6	43	21	7	4	1	1	2
組成	%	94.4	11.1	80.8	38.9	13.0	7.4	1.9	1.9	3.7

る針が存在するのですが、チリダニ類やササラダニ類にはそういうようなものではなく、ただ咀しゃくする型になっています。そう、家畜舎等でみられるサンバエ類とイエバエやニクバエ類との違い：蚊とコスリカとの違いと同様な事がいえます。しかししながら、口器がそのような刺口になつてないから害を与えないでしょか。そうとはいえないようです。一九七〇年代に入り、チリダニ類は、慢性気管支喘息や、アトピー性皮膚炎などのアレルギー性疾患の抗原（アレルゲン）として働いていることが内外の研究者によつて明らかにされてきております。

又、つい最近（本年初め頃より）に至つては、川崎病（MCLS）との関連で、このチリダニ類が大きな役割を果してゐるのではないかと非常な関心が払われてきています。このチリダニ類のやつがいな一面は、どの家庭にもそして全世界に存在します。

一つの家庭で詳細みてみましたが例を上げてみましょ。このおうちは、4LDKの鉄筋住宅で玄関、ろうかはカーペット張り、ダイニングの半分をカーペ

ト張りをしてあるお宅です。いずれもカーペットは、コンクリートじか張りのところあります。このお宅をモデルに各部屋毎にゴミをそらじきで採取するとともに、ソファーセットや、上ブトン、毛布、整理タンス等々からゴミをあつめてダニ類の分布をみてみました。結論から云つてすべての場所から、すべての日常使つてゐる家具、衣類からもダニが発見されました。もちろんチリダニ類が主流でありました。比較的多く見つかつた所は、カーペット表面（台所）を筆頭にソファーセットの長椅子、一客イス、又、洋間二部屋でありいずれも織維に關かわるものに多く、和室がそれにつづいていたのです。物品それぞれの面積や大きさは違いますので単純には比較できないのですが、カーテンや食器棚の中にさえも分布してました。さらにおどろくべき事は、一年中使つてゐる布団類にも非常にたくさんチリダニ類が発見された事です。フトンは約十二年使用されていましたが、その20%の中を検査してみた数字から、このフトン一枚に含むダニ数は六十万匹にも及んでいることで

す。この事から、いかに毎日
そうじが大切であるか身にしみ
るのであります。

以上、"がゆみ"に関連する
昆虫類や、ダニ類を登上させま
したが、まだまだ書き落として
いる物も多くあると思われます
が、このあたりで稿を終らせて
頂きます。

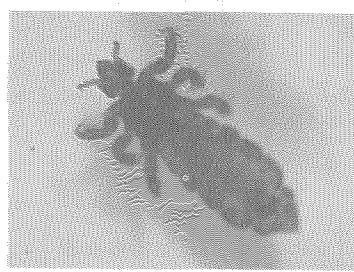
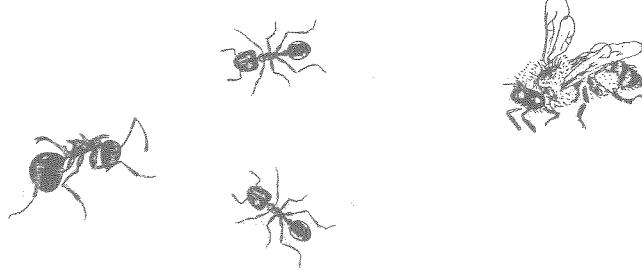


写真3
アタマジラミ(小学生より)

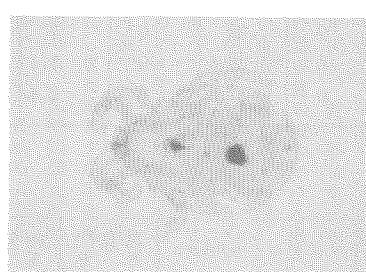


写真2
ツツガムシ類

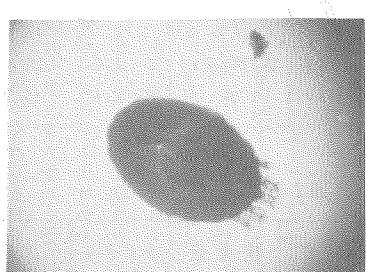


写真1
イエダニ

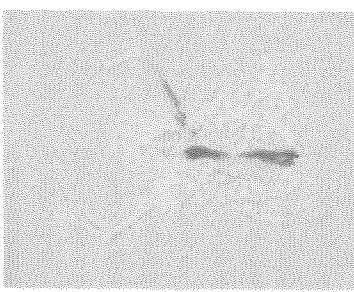


写真5
ホツツメダニの若虫

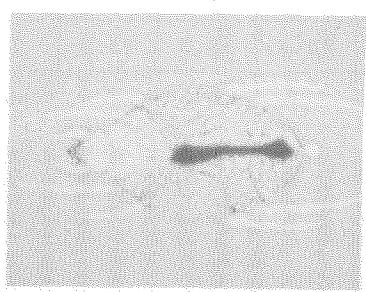


写真6
アシナガツメダニの若虫

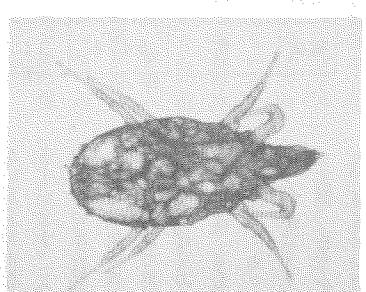


写真7
ケナガコナダニ



写真 9
ヒメスギカミキリムシ

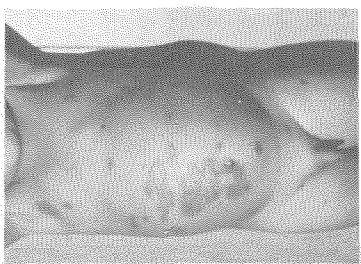


写真 8
ツメダニ(写真 7)による被害例

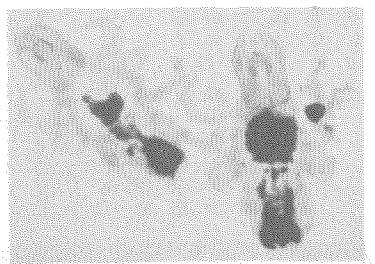


写真 7
ツメダニ類(ケラカラブティス)

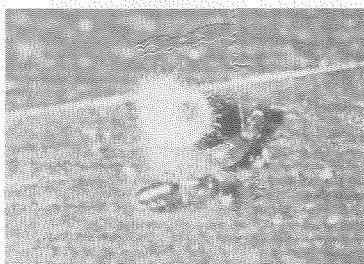


写真 12
シパンムシリアリガタバチ
とシパンムシ幼虫

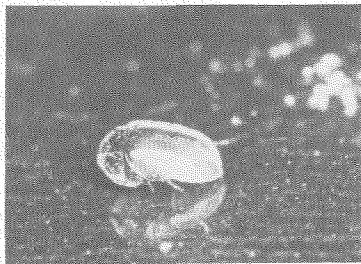


写真 11
タバコシパンムシ成虫

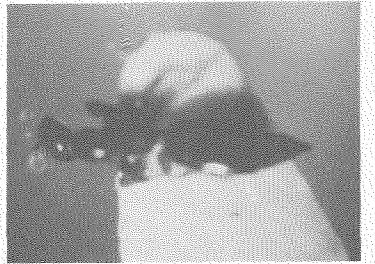


写真 10
クロアリガタバチ

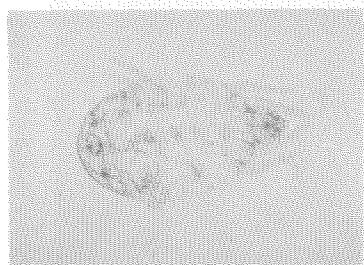


写真 15
チリダニ類(ヤケチリダニ若虫)

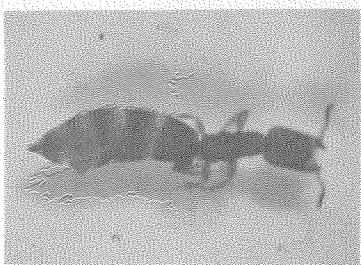


写真 14
シパンムシリアリガタバチ♀



写真 13
シパンムシリアリガタバチ♂